



日本

ハンザキ研究所ニュース 2011(6) : 通巻 No. 66

発行 2011年6月30日

〒679-3341 兵庫県朝来市生野町黒川292

Tel/Fax: 079-679-2939

E-mail: info@hanzaki.net

URL: http://www.hanzaki.net

NPO 法人 日本ハンザキ研究所 栃本 武良

作業ボランティア

今回初めての試みとしてボランティアを募集した。今まで、ほとんど一人で構内の整備をポツポツとやってきたが、限界を感じたからである。昨年の10月にワサビ田の日よけ用寒冷紗取り付けの骨組みとして、単管を組み立てていて脚立から落下した話は当ニュース No.58 に書きました。結局、肋骨1本が折れていたようで、右手首は押したり捻ったりするとまだ鈍痛がある。これに懲りて多くの皆さんの力を借りることとしたのである。常連のスタッフだけになるかなと思っていたら13名もの参加があった。もっとも2人は連れてこられた小学生だが、溝掘り(写真3)を手伝ってくれた。会員は4名で女性が2名参加してくれた。天候が心配されたが、今年最高気温33度を記録する暑い一日となった。やってもらいたい作業は30項目に及んでいて、何を実施するかメンバーを見て決めることにした。



龍野北高校チームの水中土木作業

最強メンバーは龍野北高校の山内先生と来た4名の高校3年生だ。このチームはアンコ淵で水中土木作業に挑戦してもらった。専門は環境工学研究科であり、なぜこのようなことをするのか説明してから取り掛かってもらった。また、女性チームは外来植物のヒメジオンの引き抜き2,000本(写真1)、昨年実施したが凄い繁殖力である。シニアチームは事務局長を棟梁に、雪重でつぶれかかったトイレの屋根の補強大工作業(写真2)で、神戸から自転車に参加した青年も加わっての作業です。午前午後各2時間の作業でしたが今期最高温の炎天下でブヨやヤマビルと戦いつつ3チームの奮闘でした。昼食は黒川名物のアマゴ井にスタッフお手製のイノシシの肉もイタドリの和え物も美味しく満足していただけたと思います。黒川温泉の入浴券で汗を流していただきました。7月は30日です、ご参加を！



写真1 引き抜かれたヒメジオン



写真2 仮設トイレの屋根の補強



写真3 巣穴への溝掘り作業



写真4 オオサンショウウオの原状復帰



写真5 川面の謎の泡



写真6 電動アシスト自転車

ハンザキの里帰り

ハンザキ 40 匹が元の川に帰りました。平成 19 年の 11 月から工事前に救出されて 3 年間の長いプール生活でした。平成 19 年(57 個体)、平成 20 年(12 個体)、21 年(21 個体)、22 年(3 個体)が捕獲され運ばれてきました。成体 93 個体、0 才幼生 5 個体、1 才幼生 18 個体ですが、幼生の多くは収容されて間もなく死亡してしまいました。巨大な機器を使った土木工事現場からの救出が、いかに難しいものであるのかということを感じ知らされた感があります。この間にも成体が 9 個体死亡しました。体重などを定期的に測定して、減少傾向にあるものや負傷個体を隔離すると言う管理が続けられたのですが残念なことをしました。

死亡状況は、測定後数日で死亡(3 個体)、隠れ家の細工不良 (2 個体)、急激な伝染性?の腫瘍 (3 個体)、行方不明 (1 個体) です。測定する時に取り扱い上問題が起こることは骨格系のゆるい動物であることから内臓や脊椎を痛めた可能性が考えられます。扱いなれた作業員が注意しながら丁寧に扱わねばなりません。隠れ家に関しては受託業者に対して安易に妥協した私に責任があります。指示通り作らせれば良かったと反省しています。伝染病に関しては密度高く飼育する場合に最も心配な出来事でしたが、収容して 3 年目に発症したことは意外でしたが、これも大学の専門家に調べていただいたのですが原因不明で残念なことでした。生き物ですから死は付いて回るのですが、このように振り返ってみると半数は防ぐことができた人為的なミスと考えることが出来ます。

6 月 20 日、小雨降る中で生野小学校 6 年生 37 名の手で 40 個体のハンザキが放流されました。これらの児童たちは昨年の自然学校でハンザキ研にやってきて勉強したり、ハンザキに一人ひとり餌をやったりした経験があったのでした。順番にハンザキを抱きかかえるようにして水際へ運び放していましたが、中には直接手で触ることができない児童もいて同級生から声援を送られたりと大騒ぎでした。一つ間違えれば咬まれて怪我をするかもしれませんが、きっと一生の思い出として心に残ったことでしょう。彼らの中からは将来、街を背負って活動する人材が出ることは間違いないことでしょう。その時に、小学生時代のこの体験を胸に活躍してもらえることを期待しましょう(写真 4)。

出石の川でも同じ事をしたが、テレビを見た方から文化庁へ直接抗議の電話が入ったそうです。「こんな危険なことをやらすとはけしからん」とのことだったそうです。画面から外れた所にいる私たちの存在はカメラには写りませんので分からなかったのですが、リスクも考えながらの体験学習でもあるのです。何も起こらないためには何もさせないのが一番でしょうが、それでは子供たちがかわいそうに思えます。事故を起こさないようにできるだけの対策は立てますが、万一のことも起こる可能性はあります。何もさせないほうがいいのでしょうか?それとも怪我の毎日を生き抜いてきた野生児であった私たちのノスタルジアなのでしょう?豊かな自然環境は危険が付き物です。遊園地ではありませんので、絶対安全などということはありません。危険に対する教育は絶対に必要なことだと思います。私も私の孫もハンザキに咬まれています・・・

円山川水系におけるオオサンショウウオ事情 番外編②

小学生がヒダサンショウウオを発見！

但馬国府・国分寺館 加賀見 省一

6月10日、豊岡市立西気小学校の敷地内(標高 346m)で、小学生が小型のサンショウウオを発見したとの連絡を頂きました。写真を見せていただいた所、準絶滅危惧種のヒダサンショウウオであることが分かりました。

ヒダサンショウウオは、和歌山県を除く関東以西の本州に分布する小型のサンショウウオで、山中の渓流域に生息します。兵庫県にはアベサンショウウオ、カスミサンショウウオ、ハコネサンショウウオとヒダサンショウウオの4種が生息すると言われ(ブチサンショウウオは不明)、中でもヒダサンショウウオは比較的広く分布する種と考えられています。しかし、夜行性のため、日中は石の下や落ち葉の下などに隠れていて、めったに私たちの目に触れることはありません。平地で日中に、それも学校内で見つかるというのは大変に珍しいことで、正に生きた教材になったことでしょう。

子供たちがそれぞれの地域でこうした生き物に関心を持ち、ふれることで生物多様性や環境問題を考えるきっかけになると言うことは、とても素晴らしいことだと思います。私たちもこれから更に応援していかなければと思います。なお、このヒダサンショウウオは写真撮影後、逃がしていただきました。

“ハンザキ所長の補足”

小型のサンショウウオ類はサンショウウオ科の動物で日本には18種が知られています。大きくなっても全長で10~20㎝位にしかなりません。ハンザキはオオサンショウウオ科に属していますので、別のグループの生き物となります。それに、ハンザキが一生を水中で過ごすという両生類としては変わり者であるのに対して、サンショウウオ科の動物は陸上生活(卵や幼生は水中)です。兵庫県にはサンショウウオ科5種が生息すると言われていますが、両生類の権威である京都大学の松井正文教授はブチサンショウウオはいないのではないかと言う見解です。しかし、古くは佐藤井岐夫(多紀郡)、柏原高校(氷上町)、奥谷禎一(温泉町)、新穂高史(波賀町)などの報告があります。また、私が生野町から入手した個体をブチサンショウウオと同定した標本が姫路市立水族館に残っています。この標本は松井先生にも見ていただきましたが、水族館標本は痩せたり傷ついたりとはほとんど生かそうとしながら殺してしまった後の標本なのではっきりとした答えはいただけませんでした。

夜行性かどうかという点は私も考えたことが無かったし、図鑑などにもはっきり書かれていないので、京大の西川完途先生の見解をいただきました。「瓦礫や土中などの間隙で生活しているので、暗ければ昼夜はあまり関係が無いのでは」とのことです。加賀見先生の文章をよみながら勉強になりました。それにしても繁殖期以外のヒダサンショウウオの生態はほとんどわかっていないそうです。子供たちを含めて挑戦してほしいものです。

春の恵みをいただく

理事 黒田 哲郎

今年のGWが始まる前のこと、北但馬の道の駅でコシアブラの芽を購入した。山菜の王様と言われるタラの芽は有名だが、近年、コシアブラの芽は山菜の女王と言われて注目されているらしい。もちろん遙か昔からある植物であり、地域によっては普通に食べられてきたものであるが、私はこれまで知らなかった。若い頃はさほど思わなかったが、ここ数年、コゴミやフキノトウなどの山菜を食べるのが春の楽しみになってきたので、是非これも食べたいと思っていたのだが、思いがけずその機会が訪れた。

道の駅に置かれていたのは、およそ200gが入ったパックで、380円で販売されていた。後で調べると、インターネット上では100gあたり500~900円程で販売されているようだ。あまり高くなかったので意識せずに食べたが、普通に買うと割といい値段のようだ。

黒川周辺では販売されていないが、コシアブラの芽は私にとっては比較的特徴のある姿だったので、翌日より、近所に生えていないかと思いながら散歩する日々が始まった。すると、意外にもところどころにその姿を見つけることが出来た。黒川では採取して食べる人がほとんどいないようで、話題に上ることもないので村の人に聞いても「そんなのあったかなあ」という声しか聞けなかったが、比較的標高が高い場所に生えるという特性どおりのようだ。

コシアブラはタラノキと同じウコギ科の植物であるため、似たような場所に生えている事が多いのだそう。タラノキは幹が細くてひょろ長く、おまけにトゲだらけだ。しかもその幹は弱くて折れやすいので芽の採取は大変だ。コシアブラは幼木時には同様に細いが比較的しなやかで、丁寧に曲げれば端部の芽をたぐり寄せることが出来る。ただ、成長が早く、すらすらと伸びて高木になるので、5mを超えると真横にしっかりした木が立っていることでもなければ、採取は困難になる。

歳を取り、子供の頃のように身軽ではなくなってしまった。無理せずそれなりに頑張ってみたところ、写真のように25gを取ることが出来た。少ないようにも見えるが、3人家族で一回いただくには十分な量であった。取り立てをすぐに天ぷらにして食べたが、これまで食べたものとは明らかに鮮度が違う事を感じる味がした。タラの芽よりも少し苦みがあってコク深い味わいは、タラの芽よりもコシアブラの方が好きだという方がおられることをよく理解できるものであった。

ただ、この時期になると残念なことに山荒らしのような山菜採りの方がいらっしやる。日本の山はいくら山奥でも所有者が決まっています、原則としては勝手に入って、そこにあるものを勝手に取ることは許されません。都会の家の庭にある花壇の花を取ってゆくことと何ら相違はない。それでもまあ、ほんの少し自分の食べる分だけをそと取る分にはいいんじゃないかと考えている。人は古来、山の恵みをそうやって分けていただいで暮らしてきた。イノシシなどを狩りに山へ入るのと同様だ。

さて、何が残念かという、山菜採りの方にはタチの悪い人が多い(様に思う)ことだ。欲しいと思ったら何でも根こそぎ持ってゆく。タラの芽が採りにくければ、木を折ってでも採ってゆく。長枝バサミを使って枝に傷をつけながら採ってゆく。二番芽、三番芽までも採って帰る。いくらか芽を残さないと翌年生えてこないのに、一つも残さず全て採って帰る。ついでに近くに生えたササユリまで採って帰る。その辺りにある最後の一本であっても採って帰る。

そういう方々と朝の散歩時にすれ違うことがあるが、当然挨拶しあうこともない。向こうはいろいろ聞かれるとやっかいなのだろう、知らんぷりして目も合わせない。更に残念なことに、こういった方々には年配の方が多い。親の歳に近いと思われる方、それ以上と見受けられる方がこんな有りようなのはとても寂しいことだ。

ものの好き嫌いに都会も田舎もない。どこの方かは分からないが、しゃべり方からするとどうも都会の方ばかりでもないようだ。どうか自分の畑に入る時と同じように振る舞ってもらえないかと願うばかりである。

それはさておき、その後も何度かコシアブラの芽の採取にチャレンジしてみたが、とにかく高いところにあるものが多く、取ることが叶わなかった。ああ、来年はもういらぬというまでお腹いっぱい食べてみたいものだ。何とかあの高いところにある芽を取ることが出来ないか、近頃はそればかり考えながら、ずっと上を向いて散歩している。



写真8 コシアブラ



写真7 長枝バサミ持参の山荒らしさん

(ここは県立自然公園なのですが・・・)

川面の謎の泡・泡・泡

アンコ淵の水面に泡がたくさん浮いている。キャンプなどで洗剤の垂れ流しをしている人がいるのかと思ったが、事務局長さんに聞いたところ、季節的なものだそうである。そういえば、以前にオオサンショウウオ保護センターのプールの水面にも泡が浮いていて、見物に来た子供から質問を受けて答えに困ったことがあったのを思い出した。6月の初め頃から目立つようになってきて、夜間のモニター観察では泡に光が反射して水中が見えにくいほどになっている(写真 5)。

月末の作業ボランティアに参加してくれた鳥取のサイトウコンサルタントの山崎寛子さんが、水質の専門家だということだったので調べていただいた。結果は花びらや花粉などに由来するのではないかということである。この時期の河岸は白い花だらけであり、白い花びらも多数水面を漂っている。ウノハナやノイバラ、名も知らぬ房状の花をたくさんつけた低木など花盛りである。しかし、一寸前にはピンクのタニウツギも河岸を桃色に染めていたし、季節季節に色々な花が咲き誇っているのだが、何かこの時期の花には泡立てる成分があるのだろうか？

あちこち川のよどみや湾入部に同じような泡の大群が漂っているのを見ると、洗剤だと思いついて入っている方も多いことと思うが、見た目も良くないし本当の原因物質を知りたいものだ。どなたか挑戦を期待したい！！

.....

ハンザキ所長のツブヤ記録

電動アシスト自転車は快調だ。山の中では自転車を移動手段にしていた私も脚力が低下しては動きにくい。川上にいくにしても川下にしても片道は楽チンだが片道は延々と押しながら進まねばならない。そこで、電動アシストの自転車を手に入れた。上り坂でも少し力を入れるとスッと速度が出て軽く登っていく。雲の上の山城として有名になった竹田城に登った人もいるそうだ。電池をフル充電しておけば 20 キロほどを走るが、上り坂で電池が切れるとつらい。それにしても、往復共に同じ時間で走るというのはどういうことなのだろうか？坂道の有る分は早くなるのではないかと思うのですが、あちこち走り回っても同じことなのです。目下、目的地ごとに何分で往復できるのか試走中ですが、山道のサイクリングは爽快ですね(写真 6)。

生き物を預かるということは気苦労なことです。2年ほど滞在していた姫路市立水族館の2個体は30日にお迎えが来て無事に里帰りしましたが、その夜に新居で咬み合いがあって別居したそうです。ハンザキ研では同じ穴の中に仲良く？納まっていたのにどうしたことでしょうか？3年以上になる生野ダム下流の工事現場から収容したハンザキ40個体も里帰りしました。あと40個体ほどが残されていますが、これももうすぐ故郷の川へ帰る予定です。こちらは無事に住み着いてくれるといいのですがどうなるのでしょうか。

ハンザキ研日誌

2011年6月

- 1日 ・NHK 最終日のロケ、放映は8月10日 “ちょっと変だぞ日本の自然”
・市川水系（竹原野地区）委員会開催、工事結果とハンザキの試験放流検討
・四つ手網購入
- 2日 4歳半（？）のハンザキ（全長19㎝、体重40g）収容
- 4日 凍結破損の濾過槽修理3台
- 6日 ・大阪シニア自然大学28名見学に
・コマドメ建設、ポンプピットの排砂作業、今年2回目
- 8日 電動アシスト自転車納入、快適に坂道を登る
- 9日 ハンザキ定期健康診断、須磨水族園葛西氏参加
- 10日 兵庫県養父土木事務所道路整備課・河川整備課と放流打ち合わせ
- 11日 ・突然のダウン、5年ぶり2度目のこと
・事務局会議8名
・モリアオガエル夜間観察会実施、12名参加、波多野講師とスタッフ8名
- 12日 川面に謎の泡・泡・泡
- 13日 ・ハンザキNo.84 減失
・ポンプピットの防砂シートの工夫
- 14日 下山、15日内科と外科へ、ダウンの原因は不明
- 16日 ビールと共に配達してもらう
- 17日 小型水中カメラ納品、エコテック西日本より130万円
- 19日 ハンザキ研ニュースNo.64・65各1,000部納入
- 20日 ・ハンザキ40個体原状復帰、生野小学校6年生の手で
・ブロー1台納入、小型エアーポンプ撤収
- 21日 ・ハイブリッド・ハンザキ8個体収容、130㎝の大物2匹目
・ハンザキ保護センタープールのBコース整理
- 23日 総会資料などの発送作業、スタッフ5名
- 25日 ・作業ボランティア13名とスタッフ4名で初の試み
・大沼理事来所、京都のハイブリッド収容について打ち合わせ
- 26日 ・NHK ホットスポット放映、ハンザキの捕食の瞬間！・・・
・予約見学2組3名、内1名入会
- 27日 ・エコテック西日本、新しい照明用ライトのデモ機持参、夜間テスト実施
・アクアリウムの水槽8掃除
- 28日 宍粟市教育委員会坂田氏他2名視察に
- 29日 神河町立寺前小学校3年生33名見学に
- 30日 姫路市立水族館のハンザキ2個体里帰り